



TITLE:

# 非可換Hardy空間における分解定理 とその応用 (Hardy空間における線 型作用素の研究)

AUTHOR(S):

齊藤, 吉助

---

CITATION:

齊藤, 吉助. 非可換Hardy空間における分解定理とその応用 (Hardy空間  
における線型作用素の研究). 数理解析研究所講究録 1979, 350: 125-133

ISSUE DATE:

1979-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/104374>

RIGHT:

## 非可換 Hardy 空間における分解定理とその応用

新潟大 理 斎藤 吉助

§1. 本講演では finite maximal subdiagonal 環における分解定理を示し、その応用として、非可換 Hardy 空間の性質や不変部分空間の構造を示すのが目的である。

記号や定義などはこの講究録の“非可換 Hardy 空間の最近の結果”を参照のこと。

§2.  $M$  を faithful normal normalized trace  $\tau$  をもつ von Neumann 環とする。  $1 \leq p < \infty$  に対して、  $L^p(M, \tau)$  を定義する。  $\Phi$  を  $M$  から  $M$  の中への faithful normal expectation で  $\tau \circ \Phi = \tau$  をみたすものとする。  $H^\infty$  を  $\Phi$  に関する  $M$  の finite maximal subdiagonal 環とする。  $H_0^\infty = \{x \in H^\infty : \Phi(x) = 0\}$  とおき、  $H^p = [H^\infty]_p$ ,  $H_0^p = [H_0^\infty]_p$  とし、非可換 Hardy 空間を定義する。 また  $D = H^\infty \cap H_0^{\infty*}$  とする。 以下を記す。

Proposition 1 (i)  $L^2(M, \tau) = H^2 \oplus H_0^{2*} = H_0^2 \oplus H^{2*}$

$$(2) \quad H^\infty = \{x \in M : \tau(xy) = 0 \quad (\forall y \in H_0^\infty)\}.$$

証明. (1).  $H^\infty + H^{lo*} = H^\infty + H_0^{\infty*}$  は  $M$  で  $\sigma$ -弱稠密であることよりわかる。

(2). まず  $x \in M$  とする。  $\tau(x) = 0$  とする。

$$\tau(xy) = 0 \quad (\forall y \in H_0^\infty) \Leftrightarrow xH^2 \subset H^2$$

が示せる。  $\Sigma = \{x \in M : xH^2 \subset H^2\}$  とおくと、 $\Sigma$  は  $M$  の  $\sigma$ -weakly closed subalgebra で  $H^\infty \subseteq \Sigma \subseteq M$  であることは明らか。  $\Sigma + \Sigma^*$  は  $M$  で  $\sigma$ -弱稠密故、至が  $\Sigma$  上乗法的であることを示せば、 $\Sigma$  は至に属する subdiagonal 環になるから、 $H^\infty$  の subdiagonal 環としての maximality から、 $\Sigma = H^\infty$ 。 従って、 $\Sigma_0 = \{x \in \Sigma : \Phi(x) = 0\}$  が  $\Sigma$  の 2-sided ideal であることを示せばよい。  $x \in \Sigma_0 \Leftrightarrow x \in M \mid xH^2 \subset H_0^2$  を示すことにより示される。

§ 3. この節では分解定理について示す。

1967年に Arveson [1] は  $\forall K \in M \cap M'$  ならば  $K = u a$ ,  $a^{-1} \in H^\infty$  を満たす  $M$  の unitary operator  $u$  と  $a \in H^\infty$  が存在することを示した。 1977年、McAsey, Muhly and Saito [7] によつて、 $K \in M$ ,  $K^{-1} \in L^2(M, \tau)$  ならば  $K = u a$  を満たす  $M$  の unitary operator  $u$  と  $a \in H^\infty$  が存在することを示した。 さらに、筆者 [2] が  $a^{-1} \in H^2$  であることを証明した。

定理 1.  $k \in M$ ,  $k^{-1} \in L^2(M, \tau)$  ならば,  $k = u a$ ,  $a^{-1} \in H^2$  をみたす  $M$  の unitary operator  $u$  と  $a \in H^2$  が存在する。

これを示すため  $x, y \in M$ ,  $y \in L^2(M, \tau)$  に対して,

$$L_x y = xy, \quad R_x y = yx.$$

と置く。  $\mathcal{L} = \{L_x\}_{x \in M}$ ,  $\mathcal{R} = \{R_x\}_{x \in M}$  とすると,  $\mathcal{L}$  と  $\mathcal{R}$  は finite von Neumann 環で  $\mathcal{L}' = \mathcal{R}$ ,  $\mathcal{R}' = \mathcal{L}$  をみたす。

定義 1.  $\xi \in L^2(M, \tau)$  が right-wandering とは  $\xi \perp [\xi H^2]_2$  であるときをいう。

Lemma 1. [1, Lemma 4. 2. 2].  $\xi \in L^2(M, \tau)$  が right-wandering とする。このとき  $u\xi \in [D]_2$ ,  $Lu^*u = P_{[R\xi]_2}$  をみたす  $M$  の partial isometry  $u$  がある。但し,  $P_{[R\xi]_2}$  は  $L^2(M, \tau)$  から  $[R\xi]_2$  の上への projection とする。

定理 1 の証明. まず  $k^{-1} \in L^2(M, \tau)$  より,  $k \notin [kH^2]_2$ .  $\xi := P_{[kH^2]_2} k$  は  $L^2(M, \tau)$  より  $[kH^2]_2$  の上への projection とする。  
 $\eta = P_{[kH^2]_2} k$  と置く。  $\xi = k - \eta$  は right-wandering であることがわかる。そして, Lemma 1 から,  $u\xi \in [D]_2$ ,  $Lu^*u = P_{[R\xi]_2}$  をみたす  $M$  の partial isometry  $u$  がある。このとき,  $u$  は  $M$  の unitary

で  $ux = a$  とおくと、 $a \in H^0$ ,  $a^{-1} \in H^2$  であることが、[1, Theorem 4.4.1] の証明を見直すことにより、示される。 //

§ 4. この節では、 $H^p$  と  $H_0^p$  の基本的性質を調べる。まず

Proposition 1 から、次の Lemma が成り立つ。

Lemma 2.  $H^1 \cap L^2(M, \tau) = H^2$ .  $H_0^1 \cap L^2(M, \tau) = H_0^2$ .

Lemma 3.  $H^1 = \{x \in L^2(M, \tau) : \tau(xy) = 0 \ (\forall y \in H_0^\infty)\}$ .

証明.  $\subseteq$  は明らか.  $\supseteq$  で、 $\forall y \in H_0^\infty$  に対して  $\tau(xy) = 0$  を満たす  $x \in L^2(M, \tau)$  をとる。  $\tau \neq 0$  とき、 $x = |x^*|v$  を  $x$  の極分解とする。但し  $|x^*| = (xx^*)^{\frac{1}{2}}$  とする。  $0 \leq t \leq 1$  とし

$f(t) = 1$ ,  $t > 1$  とし  $f(t) = 1/t$  なる  $[0, \infty)$  上の連続実数  $f$  をとる。今  $k = f(|x^*|^{\frac{1}{2}})$  とおくと、 $k \in M$  で  $k^{-1} \in L^2(M, \tau)$  であることが示せる。  $\tau \neq 0$ . 定理 1 より、 $k = ua$ ,  $a^{-1} \in H^2$

を満たす  $M$  の unitary operator  $u$  と  $a \in H^0$  が存在する。しかるに

$|x^*|^{\frac{1}{2}} = \int_0^\infty \lambda d\epsilon_\lambda$  とすると  $k|x^*|^{\frac{1}{2}} = \int_0^\infty f(\lambda) \lambda d\epsilon_\lambda \in M$  故、 $ax \in L^2(M, \tau)$  で、さらに  $\forall y \in H_0^\infty$  に対して

$$(ax, y^*) = \tau(axy) = \tau(xya) = 0.$$

従って、Prop. 1 より、 $ax \in H_0^2$ .  $\tau \neq 0$

$$x = a^{-1}ax \in H^2 H^2 \subset H^1.$$

∴これから, Lemma 3 が成り立つ。

///

$\forall x \in M$  に対して,  $\Phi(x) = V|\Phi(x)|$  ( $V \in D$ ) であり,

$$\|\Phi(x)\|_1 = \tau(|\Phi(x)|) = \tau(V^*\Phi(x)) = \tau(V^*x) \leq \|x\|_1,$$

∴これから,  $\Phi$  を  $L^1(M, \tau)$  から  $[D]$  の上への expectation に一意に拡張できる。従って, ∴  $\alpha \geq \beta$ , 次の Lemma が容易にわかる。

Lemma 4.  $H_0^1 = \{x \in L^1(M, \tau) : \tau(xy) = 0 \ (\forall y \in H_0^{\infty})\}$   
 $= \{x \in H^1 : \Phi(x) = 0\}.$

定理 2.  $1 \leq p \leq \infty$  とする。

$$(1) \ H^1 \cap L^p(M, \tau) = H^p, \ H_0^1 \cap L^p(M, \tau) = H_0^p.$$

$$(2) \ H^p = \{x \in L^p(M, \tau) : \tau(xy) = 0 \ (\forall y \in H_0^{\infty})\}.$$

$$(3) \ H_0^p = \{x \in L^p(M, \tau) : \tau(xy) = 0 \ (\forall y \in H_0^{\infty})\}.$$

証明(1). Prop 1 と Lemma 2 より,  $p = \infty$ , 2 のときは

すでに示した。∴  $1 < p < 2$ ,  $\frac{1}{p} + \frac{1}{2} = \frac{1}{p'}$  とする。

∴  $\alpha \geq \beta$ ,  $H^p \subseteq H^1 \cap L^p(M, \tau)$  は自明,  $\forall x \in H^1 \cap L^p(M, \tau)$  とする。

$x = |x^*|V = |x^*|^{\frac{p}{2}}|x^*|^{\frac{p}{2}}V$  とおくと, Lemma 3 における連続関数

$f$  に対して,  $k = f(|x^*|^{\frac{p}{2}})$  とおくと,  $k \in M$ ,  $k' \in L^2(M, \tau)$ .

∴  $\beta = 0$ , 定理 1 より,  $k = ua$ ,  $a' \in H^2$  をみたす  $M$  の unitary

operator  $u$  と  $a \in H_0^{\infty}$  がある。∴  $\alpha \geq \beta$ .

$$ax = u * R |x|^{\frac{p}{2}} |x|^{\frac{p}{2}} v \in L^p(M, \tau)$$

又,

$$ax \in H^1 \cap L^p(M, \tau) \subset H^1 \cap L^2(M, \tau) = H^2 \subset H^p$$

$$z = z''$$

$$x = a^{-1}ax \in H^2ax \subset [H^2ax]_p \subset H^p$$

従,  $z$ ,  $1 < p < 2$  のとき,  $H^1 \cap L^p(M, \tau) = H^p$

同様に  $z$ ,  $1 < p < 2$  のとき,  $H_0^1 \cap L^p(M, \tau) = H_0^p$  が成り立つ。

次に  $2 < p < \infty$ ,  $\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$  とする。  $H^p \subset H^1 \cap L^p(M, \tau)$  は自明。  $y \perp H^p \Rightarrow \tau(yx) = 0$  ( $\forall x \in H^0$ )

Lemma 4 により,  $y \in H_0^1 \cap L^q(M, \tau) = H_0^q$ 。 したがって,

$y \perp H^1 \cap L^p(M, \tau)$  がわかる。 従,  $H^p = H^1 \cap L^p(M, \tau)$ 。

(2) と (3) は (1) から自明。

///

§ 5.  $\mathcal{M}$  を  $L^2(M, \tau)$  の closed subspace とする。  $\mathcal{M}$  が left-invariant といふ。  $H^0\mathcal{M} \subseteq \mathcal{M}$  をみたすときについて。 このとき, [7] で  $\mathcal{M}$  が left-invariant ならば  $\mathcal{M} \cap M \neq \{0\}$  を示した。 分解定理の 1 の応用として,  $[\mathcal{M} \cap M]_p = \mathcal{M}$  を示す。

定理 3.  $1 \leq p < \infty$  とする。  $\mathcal{M}$  を  $L^p(M, \tau)$  の <sup>任意の</sup> left-invariant closed subspace とする。  $[\mathcal{M} \cap M]_p = \mathcal{M}$ 。

証明. (i)  $2 \leq p < \infty$ ,  $\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1$  とする。  $[\mathcal{M} \cap M]_p \subseteq \mathcal{M}$  と

仮定する。今 Hahn-Banach の定理より,  $\tau(\xi x) \neq 0$ ,  $\tau(yx) = 0$  ( $\forall y \in [\pi \cap M]_p$ ) をみたす  $\exists \xi \in M$ ,  $\exists x \in L^q(M, \tau)$  が存在する。 $\xi = |\xi^*|v$  とすると,  $\xi \in L^p(M, \tau) \subset L^2(M, \tau)$  より, Lemma 3 における  $f$  におこ,  $k = f(|\xi^*|)$  とおこ。  $k \in M$  で  $k^{-1} \in L^p(M, \tau) \subset L^2(M, \tau)$  であり, 定理 1 から,  $k = ua$ ,  $a^{-1} \in H^2$  をみたす  $M$  の unitary operator  $u$  と  $a \in H^p$  があつる。  $\xi = z$  定理 2 より,

$$a^{-1} \in L^p(M, \tau) \cap H^2 = H^p, \quad a\xi (\neq 0) \in \pi \cap M.$$

$\pi$  は left-invariant 故  $\forall b \in H^p$  に対し,  $ba\xi \in \pi \cap M$ ,  $\xi = z$ ,  $\tau(ba\xi x) = 0$ . 定理 2 より,  $a\xi x \in H_0^q$ . かつ,  $\tau(\xi x) = \tau(a^{-1}a\xi x) = 0$ . これは矛盾。

(2)  $1 \leq p < 2$  とする。  $1/p + 1/q = 1$ ,  $1/p + 1/2 = 1/p + q$ ,  $\delta$  は選ばれ。  $\neq a$  とし,  $\forall \xi \in [\pi \cap M]_p \subseteq \pi$  ならば,  $\tau(\xi x) \neq 0$   $\forall y \in [\pi \cap M]_p$  に対し,  $\tau(yx) = 0$  をみたす  $\xi \in \pi$ ,  $x \in L^q(M, \tau)$  がある。  $\neq a$  とし, 定理 1 より,  $a\xi \in L^p(M, \tau) \cap \pi \subset L^2(M, \tau) \cap \pi$  かつ  $a^{-1} \in H^2$  をみたす  $a \in H^p$  がある。  $\pm$  により, (1) のようにして,  $ba\xi (\neq 0) \in \pi \cap M$  かつ  $b^{-1} \in H^r$  なる  $b \in H^p$  があつる。 $\xi = z$ ,  $\forall c \in H^p$  に対し,  $cba\xi \in \pi \cap M$ . かつ,  $\tau(cba\xi x) = 0$ . 定理 2 から,  $ba\xi x \in H_0^q$ ,  $z(ba)^{-1} = a^{-1}b^{-1} \in H^2 H^r \subset H^p$  であり

$$\tau(\xi x) = \tau((ba)^{-1}ba\xi x) = 0$$

これは矛盾。 かつ, 定理が示すところ。

///



## 参考文献

- [ 1] W. B. Arveson, Analyticity in operator algebras, Amer. J. Math., 89(1967), 578-642.
- [ 2] W. B. Arveson, On groups of automorphisms of operator algebras, J. Funct. Anal., 15(1974), 217-243.
- [ 3] H. Helson, Analyticity on compact abelian groups, in "Algebras in analysis", Academic Press, New York, 1975.
- [ 4] S. Kawamura and J. Tomiyama, On subdiagonal algebras associated with flows in operator algebras, J. Math. Soc. Japan, 29(1977), 73-90.
- [ 5] R. I. Loeb1 and P. S. Muhly, Analyticity and flows in operator algebras, J. Funct. Anal., 29(1978), 214-252.
- [ 6] M. McAsey, Invariant subspaces of non-self-adjoint crossed products, Doctor Thesis.
- [ 7] M. McAsey, P. S. Muhly and K. -S. Saito, Non-self-adjoint crossed products, to appear in Trans. Amer. Math. Soc.
- [ 8] P. S. Muhly and K. -S. Saito, Non-self-adjoint crossed products II, in preparation.
- [ 9] K. -S. Saito, The Hardy spaces associated with a periodic flow on a von Neumann algebra, Tohoku Math. J., 29(1977), 69-75.
- [10] K. -S. Saito, On non-commutative Hardy spaces associated with flows on finite von Neumann algebras, Tohoku Math. J., 29(1977), 585-595.
- [11] 斎藤 吉助, crossed product における非可換 Hardy 空間について, 数理解析研究所講究録, 314, (作用素環の研究とその応用),

49-64 (1977年12月).

- [12] K. -S. Saito, A note on invariant subspaces for finite maximal subdiagonal algebras, to appear in Proc. Amer. Math. Soc.
- [13] L. Zsidó, Spectral and ergodic properties of the analytic generators, J. Approximation theory, 20(1977), 77-138.